

# 考古学者ジャコモ・ボーニと大正期の日伊交流

福山佑子、ミリアム・ピルツティ・ナーメル<sup>(1)</sup>

はじめに

一八七一年にローマが首都となって以降、イタリア王国は「イタリア」のルーツとしての古代ローマを可視化する意図を持ちながら積極的に遺跡の発掘を行った。<sup>(2)</sup> 堆積物に埋もれていた遺跡が徐々に姿を現していく中で、一八九八年から一九一五年にかけて古代ローマの政治の中心であったフォロ・ロマーノや皇帝の宮殿が立ち並んでいたパラティーンノ丘の調査を指揮するなど、重要な遺跡で発掘主任を務めたのが、考古学者のジャコモ・ボーニである。彼はこれらの発掘でラピス・ニゲルなど重要な遺物を発見しただけでなく、発掘に層位学の手法や写真技術を用いたことでも名声を博し、オックスフォード大学等から名誉博士号

を授与されるなど国際的にも高く評価されていた。<sup>(3)</sup> 三年に彼は上院議員にも選出されるが、晩年にはファシスト党へ接近し、党のシンボルとして用いられたファスケースのデザイン監修や文化活動に携わつてもいる。<sup>(4)</sup> ボーニの墓は現在もパラティーンノ丘にあるが、この墓がダンヌンツィオとムツソリーニの提案によって遺跡の一角に設けられ、後にベネデット・クローチエが彼を「魔術師や預言者のような人」と評したことも、当時のイタリアにおけるボーニの存在の大きさをよく示している。<sup>(5)</sup> しかし第二次大戦以降、ボーニはその知名度の一方で研究の対象とはならない状況が続いてきた。これは彼がムツソリーニに心酔していたことだけではなく、大学の考古学専攻出身ではない経歴や発掘方針の違いなどにより、ランチャーニなどのイ

タリア人考古学者から反感を抱かれていたことも大いに影響している。<sup>(6)</sup>しかし、近年では彼が残した発掘記録の調査を中心に多数の研究が行われ、ボーニの再評価が進みつつある。<sup>(7)</sup>そして、研究や発掘成果だけでなく、彼個人についての研究も行われる中で浮かび上がってきたのが、この著名な考古学者と日本との繋がりである。

ボーニが活躍した明治末から大正期にかけての日伊交流は、二〇一七年に明治期の日本人留学生を取り上げた著作が刊行されるなど、外交面だけでなく民間レベルの交流についても研究関心が向けられ始めている。<sup>(8)</sup>また、ボーニ研究がイタリアで進展する過程では、ロンバルディア研究所附属文書館や彼の遺族の手にボーニと日本の繋がりを示す新史料が見つかっており、これまで調査が行われていなかった日本側にも、ボーニについての言及がある史料が複数存在することが本研究の過程で判明した。<sup>(9)</sup>これまでボーニと日本の関係については、一九三二年に彼に遺贈された資料を元にボーニの助手であったテアが執筆した『伝記』が主な情報源となっており、ここには彼と日本の関係を示す箇所が複数存在する。<sup>(10)</sup>この『伝記』の記述を元に、二〇〇八年にはチャップローニ・ラ・ロッカがボーニと日本の関係を扱った論文を刊行している。<sup>(11)</sup>彼女の研究はボーニがヴェネツィアにいた頃に長沼守敬と辰野金吾と知り合った

ことや、後に田中松太郎を下宿させて彼から東洋の哲学について学んだことを紹介しているが、『伝記』以外の史料をそれほど用いていないこともあり、ボーニと日本の関係についての研究の余地は大いに残されている。そこで本稿では、イタリア側のボーニ関連史料とボーニの著作、及びこれまで調査がされていない日本側の史料を用いながら、これまで知られていなかったボーニと日本の繋がりを明らかにすることで、彼が日伊交流に果たした役割の再構成を試みてみたい。

ボーニは一八五九年にヴェネツィアで生まれ、一九二五年にローマで死去するが、彼が生きた時代は日伊交流が進展した時期と重なる。一八六六年に日伊修好通商条約が結ばれて国交が開いたのに続き、一八七三年からは井尻儀三郎を皮切りにイタリアへ留学する日本人が現れ、同じ年にはヴェネツィア商業高等学校に日本語コースが開設される。<sup>(12)</sup>一方、ボーニの晩年にあたる一九二〇年代には多数の日本人がイタリアを訪れ、イタリア国内における日本への関心も高まり、日伊の関係は緊密なものとなっていく。この変化をボーニは単にイタリア側から目撃するのみならず、当時のイタリアにおける名士の一人として、自らもその歯車の一部となりながら経験していた。それゆえ本稿では、単なる一考古学者と日本の関係だけではなく、大

正期の日伊交流の変化の過程も、自ずと立ち現れてくるだろう。

## 一 ボーニと日本人留學生の交流

ボーニと日本の繋がりは、彼がヴェネツィアで過ごした学生時代に長沼守敬と知り合ったことに遡る。このことは先行研究でも既に示されているが、その情報源である『伝記』には次のように書かれている。

一八八一年、フェッラーリとダル・ツォットの下で彫刻を学ぶためにヴェネツィア美術学院へ入学した人物がいた。東京出身の若き日本人、長沼守敬である。その頃、ボーニは建築コースの最終学年に在籍していた。彼らはすぐに友情を結ぶことになり、長沼の服装をきっかけとして、ボーニは養蚕や異国の教育に関心を持つようになった。互いに助け合い、意見を交換し合う中で、ボーニの弟のエルモラオも彼らの関係に加わることになった。後にエルモラオはヴェネツィア商業高等学校で日本語の授業を履修し、未刊ではあるが辞書も編纂している。この時期ボーニは多くの仕事を抱えており、彼自身はひらがな以降まで学ぶことはで

きなかった。<sup>(13)</sup>

一八五九年にヴェネツィアで生まれたボーニは、一九歳の時にパラッツォ・ドウカレの修復工事に携わった後、八〇年から八四年にはヴェネツィア王立美術学院で建築を学ぶ。<sup>(14)</sup>この時、ボーニと同時期に在学していたのが彫刻家の長沼守敬であった。日本語教師の職を志してイタリアへ渡った長沼は、八一年にヴェネツィアへ到着し、八七年に帰国するまでヴェネツィア高等商業学校で日本語教師を務める。この仕事が週三回の夜学のみであったこともあり、長沼は八二年一月にヴェネツィア王立美術学院へ入学し、彫刻を学び始める。<sup>(15)</sup>専攻は異なるものの、同じ美術学院で学ぶ中でボーニは長沼と知り合い、彼の弟も高等商業学校で長沼から日本語を学ぶなど、家族ぐるみの交際をしていたことがうかがえる。<sup>(16)</sup>

この『伝記』の情報はあるものの、ヴェネツィア時代のボーニと日本の関係の詳細は不明であった。しかし日本側の史料には日本人との繋がりを示す記録が他にも複数残されている。まず、萬鉄五郎記念美術館所蔵の辰野から長沼に宛てた手紙では、長沼が八二年に辰野をボーニに紹介したことが判明する。辰野から長沼に宛てた手紙は複数残されているが、その内の八三年一月三日付の手紙では、辰野

が長沼に女遊びを薦める内容の脇に、追伸として「ボーニ兄弟え宜不日一筆可呈被存候」という一文が記されている。<sup>(17)</sup>ここからは八二年一〇月三〇日から一二月二〇日頃までの二ヶ月弱のヴェネツィア滞在中に、辰野はボーニと弟のエルモラオと以降も連絡を要するほど親しく交際していたことがわかる。

また、八〇年から八七年にローマへ留学し王立美術学院で絵画を学んだ松岡壽は、親友であった長沼のいるヴェネツィアに八三年七月から九月にかけて滞在するが、彼の八月四日の日記には、「Bon. Lanzani 長沼と、夜カフェーに行き雑談す」と記されており、彼もボーニと会っていたことが確認できる。<sup>(18)</sup>約二ヶ月に渡るヴェネツィア滞在中、美術学院での長沼の褒章授与式でダ・モリンとエドアルドと知り合った以外には松岡がイタリア人と知り合った記録はない。この限られた機会の中で彼がボーニと出かけていることは、留学中の長沼がボーニと特に親しい関係にあったことをうかがわせる。

更に、長沼の留学中にヴェネツィアを訪れた妻木頼黄も『伝記』に登場する。ボーニはヴェネツィアのサン・マルコ広場鐘樓の発掘や倒壊後の再建工事に関与するが、この鐘樓の鎗を建築家の妻木に見せた所、彼が芝の増上寺の基壇に似たものがあると発言したとの記述が残されている。<sup>(19)</sup>

妻木は一八八六―九一年にベルリンに留学して以降は渡欧しておらず、長沼の滞在期間を考えると、おそらく八六―七一年頃にヴェネツィアを訪れ、ボーニと話す機会を得た可能性が高い。

このように、ボーニは八二年から八七年にかけて日本人と知り合う機会を度々得ていた。彼はヴェネツィア留学中の長沼を介して、辰野、松岡、妻木と交流するが、そもそも長沼との長期にわたる交友も含め、当時のイタリアにおいて日本人と知り合う機会が限られていたことを考えると、特に日本関連の仕事に携わっていたわけでもない人物としては稀有な経験であったと言える。松岡は自らの留学時代を回想した際、当時のイタリアの日本在留者はローマの公使館員と自身に加え、トリノの種紙商人三名とヴェネツィアの長沼しかおらず、日本人は珍しい存在だったと述べている。<sup>(20)</sup>ジャポニスムなどを通じて日本についての知識はイタリアでも広まりつつあったが、人的交流の機会は依然として限られていた。住んでいたのが商業高等学校に日本語コースが設置されていたヴェネツィアであり、当時イタリアで学んでいた数少ない日本人留学生と同じ学校で学び、知り合うという、様々な偶然的産物として、ボーニは日伊交流の黎明期に日本人と継続的な交友を結ぶことになった。そしてこの経験は、後に著名な考古学者となる

ボーニの日本への関心の基礎を形作るようになっていく。

## 二 ボーニと田中松太郎

一八八七年の長沼の帰国と前後するように、ボーニは八年に文化財調査官に任命されてヴェネツィアを離れ、イタリアでの調査に従事することになる。更に九二年からローマで遺跡や文化財の調査に携わり、九八年にはフォロ・ロマーノの発掘主任という大役を担うことになった。<sup>(21)</sup>このようにボーニの立場は変化したものの、ヴェネツィアで育まれた日本との関係が途切れてしまったわけではなかった。ボーニが重要な遺跡を任されるようになったまさにこの時期に、Tanaka Mazutaro という日本人が彼の家に滞在している。

ボーニはこの田中から東洋の思想を学んだとされ、『伝記』にはフォロ・ロマーノのマクセンティウスのバシリカの前で田中が弓を引く印象的な写真も掲載されている。(図1)『伝記』と先行研究において「哲学者」として紹介されているものの、この人物の詳細はローマで拠り所がなく困窮していたために長沼を紹介してボーニが引き取ったという情報しか知られておらず、先行研究でもその正体は不明と

されていた。<sup>(22)</sup>しかし、この時期にイタリアへ渡航した日本人の記録からは、彼が一八九七年からローマに留学した田中松太郎であったと推測することができる。彼は田中美代治に写真術を学んだ後、九七年に牧野伸顕のイタリア公使赴任に随行しローマへ渡った。その後、一九〇〇年のパリ万博で事務局員を勤めた後、翌年からウィーンの写真製版教習所で三色版印刷術を習得している。○四年の帰国後は東京印刷等で働き、一五年に半七製版所(現半七写真印刷)を創業した「美術印刷の父」とも称される人物である。<sup>(23)</sup>ただし、彼のウィーン滞在については帰国後に語った



図1 フォロ・ロマーノのマクセンティウスのバシリカの前で弓を引く田中松太郎(ボーニ旧蔵)

Tea, Giacomo Boni, vol. 1, Tav. XVIIIより

記録があるものの、ローマ滞在についてはほぼ不明な状況にあった。しかし、ロンバルディア研究所附属文書館には二五年のボーニの死後に田中が送った追悼の手紙が残されており、彼のローマ留学の様子とボーニとの関係の一端を知ることができる。

私をボーニ氏に紹介してくれたのは、彫刻家の長沼氏でした。彼は私の友人で、ボーニ氏とも古くからの友人でありました。現在、彼は館山で暮らしています。長沼氏はその時、偶然ローマを訪れていました。ボーニ氏はヴェネツィアに生まれ、私の聞いた所では考古学と西洋古典学に精通していました。私は彼が辰野金吾先生と学校時代の友人であったと知っていたので、辰野氏が日本銀行の設計を担当し、現在建設中であることを彼に伝えたところ、目を見開きながら驚いていました。おそらく彼は辰野氏に嫉妬したのでしよう。彼は私に宿舎を提供してくれたのみならず、親しい研究者や芸術家など、多くの紳士と会わせてくれました。更に『タイムズ』誌のウィーン特派員であったシユタット氏にも紹介してくれています。私はボーニ氏とダンテ協会へ行きました。私がローマを離れてウィーンへ引越す時には、オルヴィエートからヴェ

ネツィアまでの芸術旅行を手配してくれました。彼の紹介状のおかげで、フィレンツェやヴェネツィアの大教授や美術館の館長は敬意とともに私を歓待してくれました。<sup>(24)</sup>

長沼は一八九七年に第二回ヴェネツィア・ビエンナーレの日本代表団の一員としてイタリアを訪れており、ちょうどこの時期にローマに到着したものの住居が見つからなかった田中をボーニに託したものと考えられる。<sup>(25)</sup> 田中の手紙ではボーニが様々な便宜を図り、彼のイタリア滞在を生活面でも芸術面でも支えてくれたことへの感謝が綴られており、別の箇所では毎日朝食と一緒に食べた後、一日中遺跡の発掘に同行していたとも記されるなど、多くの時間を共に過ごしていたことがわかる。一方ボーニも、一九二〇年に刊行された「Sterquinius」において、彼が田中に西洋言語の初歩を教えたのに対し、田中は老子の『道德経』を解説し、一緒に紅葉した落ち葉を拾っては日本語の詩を詠じ、田中は食事や音楽も供してくれたことを記している。<sup>(26)</sup> また、文書館の史料には老子の『道德経』からの引用が記された複数のメモも残されているが、その筆跡は田中のものと類似しており、実際に田中がボーニに日本や東洋の事柄を伝え、ボーニはそれらの資料を晩年まで手元に保



管していたことも推測できる。<sup>(27)</sup>そして、このような彼らの親密な関係は後にイタリアへ日本の文化を紹介することにも繋がっていく。

田中はローマ留学中の思い出を知人に語った際、自身がイタリア人の助力を得て『万葉集』の翻訳を刊行したと述べている。<sup>(28)</sup>彼は写真業を営むのみならず、巖谷小波が主宰する文学サークル「木曜会」の一員でもあり、「木曜会」が刊行していた『活文壇』の海外通信欄にはローマ通信員として田中の名前があげられるなど、文学的な素養が高い人物だった。<sup>(29)</sup>しかし、田中自身が述べたとされる『万葉集』の翻訳の存在を確認することはできない。その一方で、一九〇〇年刊行の *Rivista d'Italia* には田中松太郎の名で書かれた論考「*un trecetista giapponese*」が掲載されており、吉田兼好の『徒然草』の解題に続いて作品の一部が翻訳されている。<sup>(30)</sup>このイタリア語で最初の『徒然草』の翻訳では、田中の名前のみが執筆者として記されているが、これは田中一人が行動したものではなく、ボーニが後押しをして実現したものとも推測される。この雑誌にはボーニもダンテ研究についての論考を掲載しており、更に先程紹介した田中の手紙にも雑誌の発行元であるダンテ協会へボーニと一緒に行ったとの記述もある。<sup>(31)</sup>更にロンバルディア研究所附属文書館所蔵史料には『徒然草』の草稿が残さ

れており、ボーニが翻訳原稿を手元に保管していたことは確かである。<sup>(32)</sup>解題からは翻訳が英語版の『徒然草』を元にしていたこともうかがえるが、田中のイタリア語力の問題や、後に自身が翻訳を万葉集と混同していることから、おそらく田中が多少は関与しながらも、日頃の田中との会話で日本への関心を深めたボーニが主導する形でこの『徒然草』の翻訳がイタリアで刊行されるに至ったものと考えられる。<sup>(33)</sup>

田中は〇一年からウィーンへ移り住んで写真学校で写真印刷の技術を学ぶが、以降はボーニと没交渉になっってしまう。<sup>(34)</sup>しかし帰国後に美術印刷業に従事して活躍する傍ら、考古学や文化財の調査で写真を重視したことで知られるボーニと同じく、日本の文化財調査に写真家として参加している。日本で最初の科学的な文化財調査と位置付けられている一九一五年に行われた法隆寺金堂壁画の保存調査では、田中がこのような撮影に多くの経験を持っていることから、彼を保存調査のための写真家として選任したことが委員会の報告書で述べられている。<sup>(35)</sup>田中のこの仕事とボーニを直接結びつける証拠はないが、ローマでボーニと暮らし、フォロ・ロマーノの発掘調査にも頻繁に同行していた経験が、田中の後の仕事に多少は影響していた可能性もあるかもしれない。

このように、ポーニと田中の関係は日常生活における私的な文化交流に留まるものではなかった。彼らが一九〇〇年というイタリアでの日本文学研究の黎明期に『徒然草』の翻訳を刊行し、日本の文学作品をイタリアに伝える役割を果たしていたことは特筆に値するだろう。イタリア人の日本文学研究でも翻訳書を刊行しつつあったが、依然としてそれほど出版点数も多くない状況において、一八六六年から現在まで刊行が続いているイタリアの著名雑誌に一部とは言い日本の文学作品の翻訳が掲載され、イタリア人が日本の文化に接するという機会を、田中の存在を介してポーニは作るようになった。ポーニが日本を愛好していることは既に知られていたが、翻訳刊行の後押しという本稿で明らかとなったポーニの行動は、彼の日本趣味があくまで彼個人の趣味に留まるものではなく、日伊の文化交流に明確に貢献するものであったことを示している。

### 三 ポーニと日本人研究者との交流

ポーニと日本人との交流は、当初は長沼を介して日本人と偶然知り合う中で生まれた個人的な繋がりが主であった。しかし、ポーニがフォロ・ロマーノやパラティーノ丘の発掘主任となって調査を指揮し、考古学者として名声を

博すようになると、彼の存在はイタリア考古学と日本の間の架け橋としての役割も担うようになる。二〇世紀初頭には日本人研究者が欧米に渡航して学ぶ機会も増加し、彼を訪ねる研究者も現れるようになる。イタリア側に残された史料はポーニの個人的な友人関係に基づくものが多く、日本人研究者との繋がりを示す記録は残されていないが、日本側の渡航記録や雑誌記事にはポーニの研究への言及や彼との面会の記録が存在する。

考古学者としてのポーニの活動が最初に日本で紹介されたのは、一九〇三年一月の『史学雑誌』に掲載されたフォロ・ロマーノの発掘についての記事であった。<sup>(36)</sup>その後の〇四年六月と〇六年一月にもポーニによるラクス・クルティウスの発見とトラヤヌス記念柱修復を伝える記事が掲載されている。<sup>(37)</sup>当時の『史学雑誌』の海外史壇欄は、編集者の記述によると海外の雑誌記事と海外渡航者からの情報によって書かれていたと考えられるが、ローマ遺跡の発掘を紹介する記事は珍しく、ポーニ以外には米国の研究者によるヘルクラネウム発掘事業を紹介した一本のみであることを考えると、ポーニによる新発見は特に頻繁に紹介されていたと言つて良いだろう。<sup>(38)</sup>ポーニによるこれらの発掘についての情報がどこからもたらされたのかは定かでないが、一つの可能性として考えられるのが、一九〇三―六年



に欧州へ留学していた村川堅固の存在である。もともと、村川はその留学の大半をドイツで過ごしており、ローマに滞在したのは○五年一二月末から翌年二月二○日までの約二ヶ月のみであった。最初の二つの記事は村川がミュンヘンのルートヴィヒ・マクシミリアン大学に在籍していた頃のものであるため、ボーニから直接情報を得たものとは考えられない。<sup>(39)</sup>とはいえ、同大学で村川はローマ史だけでなく古代美術や考古学実習の授業も履修しており、ローマ考古学への関心は少なからず持っていただろう。彼のローマ滞在についての情報は少ないものの、ローマでは調べ物がたくさんあるため、昼間は実地を見学し深夜まで本を読む生活をしていたことや、ローマ滞在中に現地の著名な学者と会えることになったために予定を変えたことが家族宛の手紙に記されており、単に遺跡を見学するだけでなく、とても精力的に動いていたことがうかがえる。<sup>(40)</sup>また、帰国後の○八年に『史学雑誌』に掲載されたウェスタの巫女についての村川の講演原稿は、その内容の多くを一九○○年にボーニが書いた論文に依拠している。<sup>(41)</sup>これらの状況に鑑みると、ボーニと村川の個人的な繋がりの有無は不明だが、ボーニの考古学者としての業績が日本で最初に紹介される際に、村川がなんらかの役割を果たした可能性もあるだろう。

京都大学の考古学研究の基礎を築いた濱田耕作も一九一四から五年の欧州渡航中にイタリアへ滞在しているが、彼が帰国後に執筆した「伊太利紀行」にはローマ滞在中の一年三月六日と七日にパラティーノ丘へボーニを訪問し、感銘をうけたことが次のように記されている。

伊藤君とアピヤの古道に逍遙したる次の日、君の紹介によりて、我が大使館に林大使に謁す。男爵は我が考古学を修めつゝあるを聞きて、親切にも、さらばパラチノ丘の発掘者ボニ教授 (Prof. Giacomo Boni) は親友なれば、明日十時自ら同道して紹介してやらんと言わるゝに、次の朝大使館に到れば、大使の自動車は我等を乗せて先づフォルムに急ぐ。

フォルムよりパラチノ丘に攀ち行きて、ボニ教授を其の閑邸に訪なへば、早くも十数名の訪客あり、我は林男爵に紹介せられて、しばし物語るに「考古学は殊に如何なる方面を研究するや」と問はれて、特に「研究法」をと答ふればさらば、此の冊子を贈らんとて、伊太利語にて記したる Il Metodo nell' esplorazione archaeologiche (考古学的発掘の方法) と云ふを与へらる。このことには古跡の保存の項に、有害なる植物、風致を添へ有益なる植物などの事を記せるは、流

石に伊太利学者の美術的なるを思はざるを得ず。「此の土曜に再び来らるれば、親しく新発掘の處を説明せん」とのことに忝なしとてパラチノ丘を下りてチトスの門よりコリゼオの傍に出で、待せたる自動車に投じて大使館に帰りぬ。

土曜日（三月七日）には大使に従ひて再び自動車をフォルムに走らしパラチノに登る。我等は数人の英米の客と共に、先づ一室にてボニ教授より俯瞰写真によりて場所の説明あり、小さき発掘物をも示さる。：ボニ教授は諧謔を交へて面白く説明せられたるも、時に聴取り難きもの少なからざりしは残念なりき。それより羅馬古代の植物など植えたる花壇を過ぎ教授の邸に帰れば、時已に午に近し、我等は親切なる教授の指導にボムペイのそれよりも鮮なる壁画の色彩に魅せられ、奇しき羅馬の最も古き遺墟に引廻され、陶然として酔へるが如し。我は此の機会を與えられたるボニ教授と林大使の厚意に感謝するの外なきなり。

ボニ教授はランチャニ氏と共に羅馬の考古学者の泰斗なり。而かもラ氏とは其性行同じからず共にフォルムの発掘に携はりしも、遂にボニ教授は別れてパラチノ丘の発掘に専心従事することとなり。パラチノ丘上カジノ、フワルネーゼ（Casino Farnese）の閑居

に独棲して、ただ考古と風月とを楽しむの心事はボニ教授に非ずんば誰人か解するを得んや。英学会のアシユビー博士もボニ教授のみは、他の伊太利考古学者と其の撰を異にし、自ら発掘を監督して之れを粗略にせず、最も科学的態度に出づと云へり。さても斯くの如く屢々相重なり、複雑多様な建築の遺跡を発掘する困難は、我が日本の古墳の発掘などとは日を同うして語る可からず。即ち発掘は同時に修理復旧を意味すること、我れはじめて之を体読するを得たり。<sup>(42)</sup>

ここで言及されているボニの論文は、現在も京都大学附属図書館に所蔵されており、京都出版一周年の日にボニから贈られたという一筆が最終頁に記されている。<sup>(43)</sup>濱田は後に日本の考古学研究の基本書となる『通論考古学』を執筆するが、この本ではボニの研究への言及がなされている。まず考古学調査法についての説明では、層位法を紹介する際にボニの論文に掲載されていたフォロ・ロマーノのコミティウム附近の層位図を引用してこの手法を解説している。<sup>(44)</sup>また、調査の際に写真術を用いることの重要性を説く際には、近年の特筆すべき成果としてフォロ・ロマーノの調査で航空写真を活用したことにより、フォカス記念柱の碑文が発見されたことを紹介している。ここでは他の

研究者の著作を引用しつつ航空写真が紹介されているが、この撮影を指示したのはボーニであり、彼は考古学において航空写真を最初に活用した人物として知られていた。<sup>(45)</sup>濱田の旅行記には俯瞰写真を使ってボーニが遺跡の解説をしたとの一文があり、おそらくこの経験が『通論考古学』における航空写真の記述に繋がったのだろう。この本の巻末には一四冊の研究書の解題も掲載されているが、英語、ドイツ語、フランス語の著作に混じり、ボーニの論文がイタリア語文献として唯一取り上げられ、イタリアの発掘方法や美術的思想を重んじる傾向を知ることができる著作として紹介されている。<sup>(46)</sup>濱田は一九一八―一九年に『史林』で連載した「考古学の葉」を元に『通論考古学』を執筆しているが、連載では巻末の文献紹介以外にボーニへの言及はなく、書籍にする際にボーニの論文を読み直して情報を加えたと思われる。<sup>(47)</sup>その後、彼は二二年に『写真芸術』へ掲載された論考においても、再び気球を使った遺跡の俯瞰写真の事例を紹介して考古学調査における航空写真の重要性を説いている。<sup>(48)</sup>

後に角田文衛が濱田による「ローマ考古学概説」について述べた際、イタリアの学界にも見るべき研究や調査はあったけれども、当時の古典考古学界の趨勢からすれば、濱田がイギリスとドイツの考古学者たちの研究業績を参酌

したのは適切であったと述べているように、この頃のイタリア考古学は軽視されがちな状況にあった。<sup>(49)</sup>これは、先程の濱田の旅行記におけるイタリア人考古学者ランチャーニへの批判にも表れている。その中で、ボーニの研究業績は村川や濱田を通じて早期に日本に伝えられることになり、イタリアの考古学研究が日本で具体的に紹介される機会を提供することになった。これには、かねてよりボーニが持っていた日本人との繋がりがその一助になっており、濱田の場合には当時の駐イタリア大使がボーニの友人であったという偶然もあって面会が実現している。そして、後に濱田がボーニによる考古学調査の特色でもある発掘への写真技術の導入の重要性を繰り返し強調している点は、ボーニと日本人との関係が、日本の考古学研究にイタリア考古学の知見の導入することに繋がっていったと言うことができるだろう。

#### 四 一九二〇年代のボーニと日本

一九〇八―一六年に大使を務めた林権助はボーニを友人と述べていたが、ボーニは以降も大使館関係者と緊密な関係を築いており、二〇―一六年に大使を勤めた落合謙太郎についてもボーニとの繋がりを示す史料が残されている。落

合の在職期間中の二二年に欧州渡航中の裕仁親王がイタリアを訪れるが、七月一四日のフォロ・ロマーノとパラティノ丘見学の際にボーニは案内役を務めている。彼はこの時の感想をイタリアの新聞に寄稿しており、フォロ・ロマーノを見下ろすテラスにおいて、古代ローマの凱旋式、建国者ロムルス<sup>50</sup>の墓で行われた宗教儀式、戦時殺人者の贖罪法、内乱鎮圧法、犠牲的精神、祖国の愛、正義の観念、及び古代ローマ人を偉大な民族かつ欧州大陸における權威の宣揚者にした様々な史実を裕仁親王に説明したと記している。古代ローマの政治の中心であったとはいえ、この遺跡を解説する内容としては特異に感じられるこれらの説明は、前年に裕仁親王も列席して行われた明治神宮鎮座祭など当時の日本の状況と符合している。そして、このように特異な説明の背景になったと考えられるのが、大使館関係者とボーニの交流である。

二二年一〇月二三日には西洋古代史研究の坂口昂がパラティノ丘のボーニを訪ねている。坂口は落合大使の旧友でもあり、彼の旅行記には「O君〔落合〕は晴天午後毎に婦人同伴パラチノの岡を散歩する。羅馬人はパラチノは日本大使のpromenadeの場所だといつてゐる位だ。O君なかなか羅馬の考古學に通ず」との記述があり、落合がボーニの家を足繁く訪れていたことがうかがえる。坂口はボーニ

ニ訪問の記録を残していないが、彼に同行した西洋中世史の大類伸の旅行記には「翌二十三日は大使館の藤井書記官の案内で博士〔坂口昂〕と諸井氏、それに坂口博士と同時に来欧されさうして二、三日前羅馬に來られた京大の深田博士と私との四人が、パンテオン附近の料理店で昼食の御馳走になり、それから一同馬車でフォロ・ロマーノの遺跡に赴いた。遺跡の一部なるパラチノの丘上にはボーニ老教授の邸宅がある、ボーニ教授はフォロ・ロマーノの遺跡を発掘し研究した功労者で、伊太利学会の耆宿である、さうして今でも特に遺跡の中央に邸宅を構えることを許されて居るのである。一行はその家を尋ねて老教授に面会したが、教授が非常の高齡である為め一応の挨拶がすんだ後直ちに退出したが、教授の好意に依てパラチノ丘上の地下に発掘されたネロの宮殿跡と称する新しい遺跡を見物することになった。」とあり、濱田の事例と同様に研究者の繋がりではなく大使館の案内によってボーニを訪ねていることがわかる。<sup>51</sup>

更に二〇一二年に大使館附武官としてローマに駐在していた山縣武夫の回想録にも、「この廢墟の小さい丘の一部に、ささやかな館を建てて常住している、チャコモ・ボニという翁がいた。自分は折々そこを訪れて、色々な話を聞くのを楽しみとした。：天皇陛下が皇太子殿下に在せし

時、パラティノの丘から古代羅馬の遺跡を御覽遊ばされつゝ、ボニ翁の説明をお聴き遊ばされるのを拝したのも畏き思い出であつた。その感激をいつも話していた翁も今は故人となつてしまつた」という文章がある<sup>(53)</sup>。彼は裕仁親王の訪問以前から極めて頻繁に遺跡を訪れ、番人とも顔見知りになるほどの考古学好きであつたと自ら述べており、この時期に複数の大使館関係者が足繁くボニニを訪れていたことの証左となつている。またイタリア側の記録においても、山縣が裕仁親王の欧州訪問を記録した写真帖をボニニに贈つたことと、彼が写真帖に書き添えた文章の引用が『伝記』に記されていることから、彼らの交友が裏付けられている<sup>(54)</sup>。

落合と山縣が足繁くパラティノ丘を訪れ、裕仁親王訪問以前からボニニと接触していたことを示すこれらの記録からは、大使館関係者がかねてより面識のあつたボニニに対して要請した結果、古代ローマの出来事の中でも皇太子の学習や検討の素材となるような事例が選定され、遺跡の案内の内容が特別なものになつたと考えることもできるのではないだろうか。

また、禁酒運動で知られる青木庄蔵の一九二三年の欧米視察の際にも、彼がローマ大使館で渡航目的を伝えた所、藤井代理大使にボニニを紹介されている。青木は各国の禁

酒運動の見聞を目的としてイタリアへ赴いており、ボニニは二〇年頃に飲酒が社会に与える害悪についての論説を盛んに発表していた。青木の旅行記によると、ボニニは歴史を引き合いに出しつつ禁酒の重要性を説いたのち、イタリアの禁酒の状況を伝えるために青木を警視總監に紹介する便宜供与も行つてくれたと述べている。一方イタリア側の史料でもボニニが日本の禁酒運動関係者から贈られた岐阜提灯を好んでいたという記述があり、文書館所蔵の住所録にも青木の名前が登場するなど、この面会をきっかけとして以降も禁酒運動を通じた日本との繋がりを持っていたことが示されている<sup>(55)</sup>。

ボニニは一九二五年に病没するが、本節で示したように彼は最晩年にも日本人との繋がりを持ち続けていた。これには当時のイタリアにおいて日本への関心が高まつたことも関連してはいるだろうが、学生時代を皮切りに長期に渡つて育まれたボニニと日本人との交流が積み重なつた結果でもあつた。ボニニはヴェネツィア時代に知り合つたジョン・ラスキンや教育大臣を務めたボセツリなど、個人的な関係を足がかりとして人生を切り開いてきた<sup>(56)</sup>。人との関係を重視するボニニであればこそ、ヴェネツィア留学時代に始まる日本人との交流が継続的なものとなり、後に日伊双方における文化交流を生み出すものになつたとも言え

るのではないだろうか。

## おわりに

ポーニと日本の関係は、ヴェネツィアでの学生時代に培われた日本人留学生との関係を端緒としながらも、日伊交流が進展していくなかで広がりを見せていく。これまでの研究においてポーニと日本の関係は、長沼など日本人の友人がおり、東洋の哲学に関心を持っていたという、彼の個人的な関係や日本趣味として紹介されがちであった。しかし、本稿で新たに明らかとなった多くの日本人との交友関係と、これに基づく彼の活動は、彼が日伊双方の文化交流を推進する役割も担っていたことを示している。また、ポーニは日本人留学生がイタリアで学ぶようになった時期から一九二〇年代までの日伊交流を間近で経験した人物だが、彼の日本への関心が友人との交流による一時的なものではなかったことは、田中が居候をしていた時期にまで遡る資料をポーニが保管しており、これらの日本語史料が遺贈されて文書館に所蔵されていることにも表れている。<sup>(57)</sup>そして、特に晩年のポーニによる日本への関心の強さは、彼が一九二〇年と二一年に発表した論考で日本について取り上げていることから明らかにだが、とりわけ裕仁親王のイ

タリア訪問後のエピソードにおいて顕著に示されている。<sup>(58)</sup>

一九二一年秋にポーニがイタリアの雑誌へ寄稿した文章には、裕仁親王の訪問を記念してパラティーノ丘に日本古来の植物を植えたいという彼の要望が叶えられ、蜜柑、木瓜、百合、菖蒲、朝顔が、翌年の春に到着する予定であることが、興奮と共に記されている。この出来事について日本側の資料では、落合大使を通じて伝達されたポーニの希望により、一九二三年にハウチワカエデ、チョウジャノキ、マテバシイ、タラヨウ、イイギリ、モチノキ、トキワカエデの種子が下賜されたと記されており、贈られた植物に違いが生じてはいる。<sup>(60)</sup>とはいえ、いずれにせよポーニの希望が叶えられ、古代ローマの中心であった場所に日本の植物を植える計画が成就しつつあったことは確かである。遺跡を訪れる多くの人々に日本とイタリア、そしてパラティーノ丘との繋がりを示すことになるこの計画は、ポーニが二〇年以上に渡って暮らしたこの地への愛着と同時に、日本への関心の強さと深さが示されている。

本稿で述べてきたように、ポーニと日本の繋がりは単なる個人的な交友関係に留まるものではなかった。彼の存在を通じて多くの日本人がイタリアや考古学への関心を深める一方で、ポーニ自身も日本についての事柄をイタリアに伝える役割を多少なりとも果たしていた。考古学者ポーニ





*Italiano per gli studi storici* 29 (2016), pp. 245-78 などがあり、イタリアを中心にボーニの発掘報告書を元にした研究成果の再検討とボーニ個人についての研究が進んでいる。またイタリア以外でも A. J. Ammerman, 'On Giacomo Boni, the origins of the Forum, and where we stand today,' *Journal of Roman Archaeology* 29 (2016), pp. 293-312 がある。

- (8) 石井元章『明治期のイタリア留学』吉川弘文館、二〇一七年。
- (9) ロンバルディア研究所附属文書館には、テアが『伝記』を執筆した後に寄贈したボーニ遺贈史料が多数保管されている。七一箱ある史料には考古学関連のものに加え、ボーニ宛に届いた書簡やノートなどもある。この内、六七箱に日本関連の史料が纏められている。
- (10) E. Tea, *Giacomo Boni: nella vita del suo tempo*, 2 Vols., Milano, 1932. 以下、『伝記』と略す。
- (11) T. Ciapparoni La Rocca, 'Giacomo Boni e il Giappone,' in Fortini (ed.), *Giacomo Boni e le Istituzioni straniere*, Roma, 2008, pp. 79-84.
- (12) 石井『明治期のイタリア留学』、一一六一頁。
- (13) Tea, *Giacomo Boni*, vol. 1, pp. 109-10.
- (14) E. Tea, 'Giacomo Boni,' *Enciclopedia Italiana di scienze, lettere ed arti*, Roma, 1930. [http://www.treccani.it/enciclopedia/giacomo-boni\\_%28Enciclopedia-Italiana%29/](http://www.treccani.it/enciclopedia/giacomo-boni_%28Enciclopedia-Italiana%29/) (二〇一八年三月二六日閲覧)
- (15) 石井『明治期のイタリア留学』、一六六―二四三頁。
- (16) 長沼は一八八一年から八七年の帰国までヴェネツィア高等商業学校の日本語の授業を担当していた。『伝記』には長沼と明記されていないが、時期的にボーニの弟は長沼から日本語を学んだと考えられる。
- (17) 萬鉄五郎記念美術館所蔵(資料番号二六―二三) 翻刻に際しては藤野裕子氏(東京女子大学)のご協力をいただいた。文責は執筆者にある。
- (18) 青木茂、歌田真介(編)『松岡壽研究』中央公論美術出版、二〇〇二年、二三―四頁。
- (19) 長沼守敬「三〇年前のヴェニス留学」『美術新報』一一九(一九一一)(千葉瑞夫「長沼守敬とその時代展」長沼守敬とその時代展実行委員会、二〇〇六年、一三九頁に再録) Tea, *Giacomo Boni*, vol. 1, p. 157.
- (20) 松岡壽「フォンタネージと伊太利亜との想ひ出」青木茂(編)『明治洋画史料 懷想編』中央公論美術出版、一九八五年、三二五―六頁。これは一九四二年に刊行された『日伊文化研究』第六号からの再録である。
- (21) Tea, 'Giacomo Boni,' *Enciclopedia Italiana*, 1930. (一一〇

一八八二年三月二十六日閲覧)

- (22) Tea, *Giacomo Boni e il Giappone*, vol. 1, pp. 519-22; Ciapparoni La Rocca, *Giacomo Boni e il Giappone*, 2008, pp. 79-82.

- (23) 後藤眞太郎「原色印刷第一號：原色版の父・田中松太郎」『芸術新潮』昭和二八年二月号、一五三―一五頁、藤森善貢「本をつくる者の心―造本四〇年」日本エディタースクール出版部、一九八六年、一八九―九二頁、山村仁志「ウーレン、生活と美術―一八七三―一九八三」展ノート：田中松太郎について』『府中市美術館研究紀要』五（二〇〇一）、二八―三九頁。

- (24) Istituto Lombardo, Accademia di Scienze e Lettere, Archivio-Boni Tea, cartella LVII. "He who introduced me to Mr. Boni was sculptor Naganuma, who is an old friend of Mr. Boni and also of mine and lives now retired at Tateyama, Boslin, (Yapan). He then happened to have come to Rome. Mr. Boni was born in Venezia and was deeply versed in archaeology and classics in my hearing. When I told him, knowing that he was a school fellow with late Prof. K. Tatsuno, that the latter had completed a plan of the Banck of Yapan and it is in construction, he opened his eyes with wonder. Probably he was envious of him. Mr. Boni took not only care of my lodging, but also

presented me to his friends-scholars, artists and other many gentlemen. He also introduced me to Mr. Stadt a correspondent of "The Times" resident in Wien. I went to the Dante Association in company with him. When I once travelled, at my removal to Wien leaving Rome, an art itineration from Osiwait to Venezia. I was treated with respect owing to his letters of introduction to the Professors and the heads of the Museums of Florence and Venezia." 手紙は五枚に渡って記されており、この引用はその一部である。手紙の原本は不明だが、テアがタイプライターで書き起こしをした後、手書きで修正を加えたものが文書館に所蔵されている。田中は手紙の冒頭で語学力不足ゆえにローマを離れてからボニーと没交渉であったことも述べている。なお、綴り間違いは原文に基づくものである。

- (25) 石井元章「長沼守敬の中の『イタリア』」千葉瑞夫『長沼守敬とその時代展』長沼守敬とその時代展実行委員会、二〇〇六年、一一―四頁。

- (26) G. Boni, 'Sterquilinum,' *Nuova Antologia* 290 (1920), p. 354.

- (27) Istituto Lombardo, Accademia di Scienze e Lettere, Archivio-Boni Tea, cartella LXVII.

- (28) 後藤眞太郎「原色印刷第一號：原色版の父・田中松太

郎」『芸術新潮』昭和二年二月号、一五八頁。

- (29) 松田良一「巖谷小波の出生：『世界お伽噺』と木曜会」『楳国文学』九（一九八五年）、一五二頁。『活文壇』の裏表紙に「海外通信」の羅馬通信員として田中松太郎の名が記載されている。

- (30) M. Tanaka, 'Un recentista giapponese,' *Rivista d'Italia* 3-2 (1900), pp. 646-63.

- (31) G. Boni, 'Studi danteschi in America,' *Rivista d'Italia* 1-6 (1898), pp. 296-316.

- (32) Istituto Lombardo, Accademia di Scienze e Lettere, Archivio-Boni Tea, Cartella LXVII.

- (33) C. S. Eby, 'Meditations of a Recluse: A Translation of Tsuredzure Gusa,' *The Chrysanthemum: a monthly magazine for Japan and the Far East* 3 (1883), pp. 87-90; 119-22; 201を底本にしていると解題の註一に記されている。『伝記』では田中の口述をボーニが書き取ったかのよう描写されているが、これはテアの推測に基づくものだろう。Tea, *Giacomo Boni*, vol. 1, pp. 522-4.

- (34) 田中はボーニの計報と関係者が田中を探していることを瀧本キミヨから伝え聞き、親しかったフローラ・サンジヨルジョに宛てて引用した手紙を送った。手紙にはK. Takimotoとのみ書かれているが、府中市美術館所蔵の田中松太郎

『名簿』に瀧本キミヨと記されている。府中市美術館図書：九八二八一九、九八二八二三。

- (35) 文部省『法隆寺壁畫保存方法調査報告』文部省、一九二〇年、三一—二頁。

- (36) 史学会「海外史壇：「フォーラム」に於ける新発掘」『史学雑誌』一四（一九〇三）、一三〇七—八頁。

- (37) 史学会「海外史壇：フォーラムに於ける新発掘」『史学雑誌』一五（一九〇四）、六八八頁、同「海外史壇：羅馬遺跡の修復」『史学雑誌』一七（一九〇六）、一三〇七頁。

- (38) 史学会「海外史壇：ヘルクラネウム発掘に就て」『史学雑誌』一六（一九〇五）、三三—四頁。

- (39) 村川堅固関連史料については、村川夏子氏にご高配を賜り、大学の修了証や旅日記などの史料を閲覧させていただいた。厚く御礼を申し上げる。村川堅固の洋行については、村川夏子氏の講演録が我孫子市教育委員会より近々刊行される予定であり、詳細な旅の記録が紹介されることになっている。なお村川堅固の生涯については、伊藤貞夫「村川堅固先生—我国西洋史学の礎—」『熊本県の近代文化に貢献した人々—功績と人々—（平成二三年度近代文化功労者）』熊本県教育委員会、二〇一一年、二三—三六頁に詳しい。また、『史学雑誌』一五（一九〇三）、九六三頁にはドイツとオーストリアにおけるローマの城壁の研究調査

報告もあるが、これも村川堅固が留学中に見聞した情報を元としている可能性がある。

- (40) ローマ滞在中の忙しきについては一九〇六年二月二五日投函の母親宛の手紙に、ローマでの著名な学者との面会については一九〇五年二月一九日投函の母親宛の手紙に記述がある。

- (41) 村川堅固「古代ローマの火の崇拜」『史学雑誌』一九（一九〇八）、三〇—四〇、一五〇—六一頁。この講演原稿には註がついていないが、貨幣の図像を用いるなどポーニの論文の情報が多く使われている。G. Boni, Scavi nel Foro Romano, Aedes Vestrae, *Nuova Antologia* 172 (1900), pp. 425-44.

- (42) 濱田耕作「伊太利紀行（二）」『歴史と地理』一一三（一九一七）、三七五—八頁。なお、ポーニの論文名の綴り間違いは原文に基づく。

- (43) G. Boni, 'Il «metodo» nelle esplorazioni archeologiche', *Boletino d'Arte* 7 (1913), pp. 43-67; 京都大学附属図書館、八一—B一〇三。

- (44) 濱田耕作『通論考古学』大鐘閣、一九二二年、一四—五頁。

- (45) 濱田『通論考古学』一一六—九頁、Ch. Hülsen, *The Roman Forum, its history and its monuments*, Rome-New 考古学者ジャコモ・ポーニと大正期の日伊交流

York, 1909, pp. 149-150. の本には一九〇〇年に航空写真によって発見されたと記されていることから、ポーニの調査によるものと断定できる。

- (46) 濱田『通論考古学』二二—二三頁。

- (47) 史学研究會『史林』三（一九一八）、七五—八五、二六二—七二、四三八—四六、六四九—六〇頁、四（一九一九）五七—六五、二八九—九八、四五八—六七、六五一—八頁。

- (48) 濱田耕作「写真術と考古学」『写真芸術』二—三（一九二二）（濱田耕作先生著作集刊行委員会（編）『西方古典文化とその遺跡』同朋舎出版、一九九三年、二六一—三頁に再録）。

- (49) 角田文衛「解説—後記を兼ねて—」『西方古典文化とその遺跡』、四一—六頁。

- (50) 二荒芳徳、澤田節蔵『皇太子殿下御外遊記』大阪毎日新聞社、一九二四年、三四五—六頁。ポーニが新聞に寄稿した文章は一九二一年七月一日に『トリブーナ』紙に掲載された記事として掲載されており、その日本語訳が同書に収録されている。

- (51) 坂口昂『歴史家の旅から』内外出版、一九二三年、三九—七頁。引用の角括弧は執筆者による。

- (52) 大類伸「ツスコロの落栗」『芸文』一九一五（一九二八）、

一二頁。

- (53) 外務省外交史料館戦前期外務省記録六門人事一類官制及官職五項任免、賞罰、恩給其他各国駐在帝國大使館附武官任免雜件（公使館）／伊国之部、山縣武夫「古代ローマの遺跡を訪ねて」『日伊文化研究』九（一九四二）四一頁。
- (54) Tea, *Giacomo Boni*, vol. 2, pp. 512-3.
- (55) 青木庄藏『世界をめぐる』青木匡濟財団、一九二四年、三三四—四七頁。
- (56) M. Pilutti Namer, 'Safeguarding Venice. Giacomo Boni and John Ruskin,' *Change Over Time* 6-1 (2016), pp. 24-37; Tea, *Giacomo Boni*, vol. 1, pp. 202-3.
- (57) Istituto Lombardo, Accademia di Scienze e Lettere, Archivio-Boni Tea, cartella LXVII.
- (58) Boni, 'Sterquilinium,' pp. 353-7; Idem., 'Il nemico,' *Nuova Antologia* 295 (1921), pp. 239-63; Idem., 'Il principe Hirohito e la flora palatina,' *Nuova Antologia* 298 (1921), pp. 187-8.
- (59) Boni, 'Il principe Hirohito e la flora palatina,' pp. 187-8.
- (60) 宮内庁『昭和天皇実録 第三巻』東京書籍、二〇一五年、三九四—五頁。